シリーズ『会長だより：郷土の誇り』(3)大井川の橋：「蓬莱橋」「水路橋」

杉本豊久

「箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川」は、箱根峠の馬子らが歌った民謡『箱根馬子唄（はこねまごうた)』の歌いだしで有名だが、大井川は徳川家康が隠居していた駿府城の西の守りとしての役割があって、橋を架けることどころか渡し船も禁止されていた。現在の大井川には発電目的のダムが 14 個もあって、それぞれ取水して川に水を戻さないから昔のような水量はないが、この大河を渡るための長い橋が幾つも架けられている。昔からある大井川鐵道の橋梁をはじめとして、東海道本線や新幹線の橋梁、（新）東名高速道路、一般道としては、県道 381 号島田岡部線の「大井川橋」、国道 1 号（島田金谷バイパス）の「新大井川橋」、県道 34 号島田吉田線バイパスの「島田大橋」、「谷口橋」、「はばたき橋」、国道 150 号焼津吉田線の「富士見橋」などがあり、広く住民に利用されている。

あとは、観光で有名な「蓬莱橋」がある。全長 897.4 メートル。橋の長さに引っ掛けて「厄なしの長生き橋（長い木の橋)」だとか。。。木造橋といっても、橋脚の構造は鉄筋コンクリート製で、渡し板はすべて木製なので、一見すべて木製のように見える。法律上は農道に分類されていて、歩行者・自転車のみ通行可能だが有料〔100 円（小学生は 10 円)：記念チケットがもらえます！〕である。1997 年に「世界一長い木造歩道橋」としてギネスブックにも認定されている。大井川右岸にある牧之原台地の開墾のため、明治 12（1879）年にかけられた農業用の橋で、現在も旧市内の農家が対岸の茶園を管理するために利用している。当時は、右岸の牧之原と左岸の島田の町を結ぶ住民の生活路でもあったわけだ。

橋ができる以前は大井川を小舟で渡らねばならず、かなり危険を伴っていた。1869 年（明治 2 年）7 月、大政奉還により駿府に隠居した最後の将軍徳川慶喜の身辺警護を務めていた旧幕臣たちが、当時不毛の地とされていた大井川右岸、初倉にある牧之原を開拓し、お茶を作り始めた。その際に、島田宿の開拓人総代たちが、時の静岡県令（現在の知事）に橋の建設を願い出、これが許可されたため、1879 年（明治 12 年）1 月 13 日に「蓬莱橋」が完成したのだという。しかし、木橋だったため、大井川の増水のたびに被害を受け、1965 年（昭

和 40 年）4 月にコンクリートの橋脚に変え、今日の姿になった。ギネス社の認定を受けたり、映画やテレビ・ドラマのロケ地として使われたりして、観光の名所になった。歌手山本

譲二による CD『蓬莱橋』も発売されている！この橋を渡った後、右岸の橋の袂（たもと）には『897.4 茶屋』があり、島田市自慢のお茶をテイクアウト！

島田側の橋の袂には、勝海舟の銅像が立っている（堤直美制作、平成 30（2018）年 3 月 21 日除幕）。なぜか？実は、万延元年（1860 年）、咸臨丸の船長として渡米した際に、勝海舟はお茶が世界的な商品価値を秘めていることを強く認識したという。それが、中條景昭、大草高重らの指導による幕臣たちの牧之原での茶畑の開墾開始に繋がったという経緯（いきさつ）があるからだ。像の台座には、島田市茶業振興協会会長、現島田市長染谷絹代によるやや控えめだが、しかし力強い題字「勝海舟之像」が刻まれている。

また、そのすぐ横には大正・昭和期に活躍した作家吉田絃二郎の句碑もある。早稲田大学で吉田から教えを受けた八木さんという方の家を訪れた際に、大井川を詠んだ句が紹介されている。「しくれけり　暮るるもあはれ　大井川」とある。

さて、意外と知られていない橋がもう一つある。「大井川水路橋」である。数年前、同窓会長の簑川和道先輩に、ご自身の会社「ナカダ産業神座工場」を見学させていただいたときに、帰りにこの水路橋を渡ったのがきっかけで、その存在を知った。

静岡県の中央部に位置し、県内でも有数の規模を誇る大井川用水の一部をなす施設で、この水路橋の上流左岸にある川口取水工で取水された用水を右岸に流すために、島田市神座（「神座（かんざ）」は、美味しいミカンの産地としても有名である！）～島田市横岡間に架設されている。現在の水路橋は二代目で、平成 14 年から 5 年かけて建設され、平成 19 年に完成した。

プレストレスコンクリート造りで、延長 732.3m。1 秒あたり約 10 ㎥(10.22ton)の水(学校の 25mプールを約 40 秒で満杯にする水量)を左岸から右岸に流している。この水路橋の高欄には、大きな波が押し寄せるような、農業用の施設とは思えない斬新なデザインが取り入れられている。かつての水路橋はこの約 100m上流に位置し、昭和 35 年完成のものだったが、経年による老朽化と大井川の河床低下により、使用に支障が生じたため、平成 20 年度までに撤去された。この水路橋のおかげで、長年水源に恵まれなかった大井川右岸地域に農業用水が供給できるようになったわけで、明治時代の「蓬莱橋」と同様に、この地区の発展に大いに貢献してきたといえよう。

水路橋は本来水を流すための施設だが、「大井川水路橋」の特異なところは、同時に道路としての機能も備えている点である。歩行者・自転車等の他に、一般車両も通行できる強度を保有し、時間帯（15 分の通行止めを挟み、1 時間 45 分ごとに一方通行方向が変わる）や通行車両の制限（総重量 2 トン以上の車両は通行できない・制限速度 20 キロ以下）はあるが、一定時間ごとの一方通行の切り替えにより、一般車両にも開放され、施設の有効利用を図っているのだ。このような水路橋は全国的にも例がないとのこと。驚きではないか！

一方通行の車両用の通路と歩行者・自転車用の通路が半分づつに色分けされていて、何となく“ほほえましい気持ち”にさえなる。現地には、かつての水路橋の写真や解説のある掲示板、一方通行を表示する特別な信号機などが設置されている。また、歩行であれば、橋の下に用水が流れているのを覗くこともできる。

大井川の上流、川根本町には長尾川という支流があり、そこにも水路橋がある。大井川流域の大井川発電所から久野脇発電所まで、導水路が通っていて、その途中の大部分は地中を走る水圧鉄管の中を水は移動するのだが、途中２か所の水路橋で川を渡ることになる。その一つが、「長尾川水路橋」だ。

川根元町役場から長尾川沿いの道路を数百メートルさかのぼると、ほどなく川を横切るコンクリート製の古風なアーチ橋が見えてくる。河原が広く開けていて周辺からもよく見えるので知名度も比較的高いようだ。

1944 年（昭和 19 年）に大井川電源開発が建設した（現在は中部電力が所有）もので、全体がピンク色に彩色され、完成当時の美しさを彷彿させる。特に、アーチの間に縦長のトンネルのようなくり抜きがあり、お洒落なデザインが印象的だ。大井川発電所の放流水と榛原川堰堤（えんてい）から取り出された水を、滝川ダムまで運ぶための水路橋である。水路橋の上はコンクリートでふさがれ、残念ながら水流は見られない。

さらに、発電所の水は山々を貫き、大井川の支流を横断しながら進み、次の水路橋「中津川水路橋」に至る。「長尾川水路橋」と同じく大井川電源開発が、ほぼ同じ時期に建設したアーチ型コンクリート製の水路橋だが、こちらにはあのお洒落なくり抜きはなく、やや地味な橋だ。おまけに高い林道から見下ろす位置にあり、樹木に覆われて見通しがきかず、よく見えない。水流はこの後再び水圧鉄管となり、地中を通って塩郷の久野脇発電所に運ばれる。

このように、大井川水系では、幾つもの発電所で電力を供給し、また水路橋を通して地域の農業用水を供給している。今話題のリニア新幹線の工事によって、大井川水系に異常をもたらし、思わぬ事態を生じかねない（？）ことを思うと、やや複雑な気持ちを抱きつつ、帰路に就いた。

（2023.4.15）